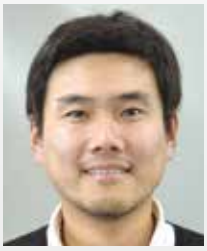
移住コンシェルジュ通信

コミュニティを再生する。「尾道空き家再生プロジェクト」の取組み



えひめ移住コンシェルジュ
板垣　義男

ノスタルジックな町並みが特徴的な広島県尾道市は、映画やアニメの舞台として取り上げられることも多く、全国的にも知名度の高いエリアである。一方で空き家は増え続けており、ディベロッパー業者等による大規模な開発も進められ、ところどころでその古きよき日本の町並みが失われつつある。このような現状をなんとかしたいと立ち上がったのが、今回ご紹介する「NPO法人尾道空き家再生プロジェクト」である。

美しいまちなみが残る尾道へ

「NPO法人尾道空き家再生プロジェクト」の代表理事を務める豊田雅子氏は尾道出身のUターン移住者。高校卒業後、大阪へ進学し、そのまま大阪で旅行代理店の海外旅行添乗員として仕事に従事する。海外と日本を行ったり来たりするなかで、ヨーロッパと日本の町並みの違いを感じはじめる。町に誇りを持ち、自然と共存するヨーロッパに対し、日本はスクラップ&ビルドを繰り返し、全国どこへ行っても同じ風景になりつつあると感じていた。

NPO 商店街に面した町屋を改修しゲストハウスとして再生した。

そんな時、故郷である尾道の美しさや住民どうしの距離が近い暮らしを思い出し、尾道に帰ることを決意する。古い住宅を使いながら次の世代に自然にバトンタッチできるコミュニティを作っていけたら。点と点を線に、さらに面にしたい。様々な思いで尾道空き家再生プロジェクトをスタートさせることとなった。まず手始めに、尾道市と協働で「尾道市空き家バンク」を開設。旧市街地の下町エリアを対象としたこの空き家バンクは、延1000人以上が利用登録しており、移住者支援だけでなく、旧市街地斜面地に家を抱えている家主さんに対してのサポートも行っている。この空き家バンク運営を皮切りに、様々な取組みを行っていく。

移住者や関係人口をも生んだ改修プロジェクト

「NPO法人尾道空き家再生プロジェクト」が手掛ける数ある事業の中でも学生を対象にした「尾道空き家再生合宿」というプロジェクトが興味深い。このプ

リノベーションだけではなく、尾道のたてもの探訪なども行う。

ロジェクトは、建築やまちづくりなどを学ぶ県内外の学生を数日間尾道に滞在させ、みんなで空き家のリノベーションを行うというもの。学生たちのほとんどは普段机上での勉強がメインであるが、空き家という素材を使って現場そのものを学ぶことによって、自分が手がけたものが再生していき、まちが変化していく様を目の当たりできるのである。また、大工職人など家づくりに関するプロフェッショナルとの関わりや学生同士の交流なども、とても有意義な機会といえる。

このように自分たちが汗をかいた分だけ「できあがっていく」という実体験は、エアコンの効いた会議室でものごとが決まるようなプロジェクトとは違い、建築を学ぶ学生にとって大変リアリティのあるものなのである。

さらに、このプロジェクトをきっかけに数名が尾道に移住をしたという。移住に至らなくても、その後参加者が自分たちの手がけた建物を観に訪れたりと、尾道が自身にとって重要な場所と感じるようになった方も多いようだ。さらに過去に参加した学生がその後大学の助手となり、自分のゼミ生を連れてきてプロジェクトに参加したという例もあるという。このように移住そして尾道ファンの形成と、関係人口を生み出す要因になったことは間違いない。

目指すはコミュニティの再生、そして継続

また、新築を建てることができない更地に住民が集まって花壇や菜園を作り、手作り公園として再生する「空き地再生ピクニック」は、移住者が中心となり積極的に行っているプロジェクトである。月に1回メンテナンスを行ったり、菜園の収穫をしたりと楽しみながら、交流の場として生まれ変えらせている。移住希望者をはじめとする市外から人を呼び込むことだけではなく、現在住んでいる方たちがさらに暮らしやすくなるような取組みも行なっているのである。

「NPO法人尾道空き家再生プロジェクト」の目指すところは単に空き家を見つけ改修することではない。リノベーションはあくまで手段であり、もっとも重要なのはまちの中のコミュニティ作りである。尾道市の旧市街地地域は地元住民の高齢化が進んでいる。このような地域に若い人が増えていき、コミュニティが継続し機能していけば、まち自体が活性化していく。例えば、天災などによる災害時にもこのようなコミュニティはしっかりと機能するはずである。空き家再生を軸に移住者を増やし、暮らしやすいコミュニティのサポートに尽力する取組みは、地域活性化への大きな道筋となりうるのである。

代表的な改修事例の通称尾道ガウディハウス